世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

A Study of the Waka poem text of "Genpei Josuiki" in the Seikidobunko Collection : On the Shigadera Priest's Discourse in Vol.48

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-03-12
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 岩城, 賢太郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1401

成簣堂文庫蔵写本『源平盛衰記』所載歌本文小考

―巻第四十八所収志賀寺上人説話をめぐって―

岩城　賢太郎

一　『源平盛衰記』古写本と本文遡求の可能性

石川武美記念図書館成簣堂文庫に蔵される『源平盛衰記』写本（以下、成簣堂本）は、静嘉堂文庫蔵本（以下、静嘉堂本）と蓬左文庫蔵本（以下、蓬左本）の他には古写本の確認されていない『源平盛衰記』において、そのより本来的な本文（古態）を考察する上で、重要な資料と言えよう。静嘉堂本（巻五・巻八の一部を欠くが巻一～巻十、及び巻十四・巻三十九の一部の本文を収める十冊）は年記等はないものの、松尾葦江氏が「現存本の中では恐らく最も古いもの」「室町末期写と見られる」と指摘し（注1）、静嘉堂本を『源平盛衰記』の最古本とする見解は概ね支持されているようである。蓬左本（四十八巻四十八冊）は巻第四十八冊奥書に書写者玄菴三級による「干時慶長十六年季冬下旬」の年記が見え、即ち慶長十六年（一六一一）の書写であることが知れる（注2）。これに比す古い本としては、川瀬一馬氏が慶長十年以前の版行と指摘した慶長古活字版になる（注3）。対して成簣堂本（巻一～巻四・巻十七巻十八・巻二十九巻三十を欠く二十冊だが、岡田三津子氏が巻五巻六の一冊は別筆で元和寛永古活字版の写しであると指摘している（注4）も、川瀬氏により慶長頃写とされたが（注5）、岡田氏の調査により、巻第三十二本文最終丁に「弘治二天二月日校合」の朱書による書き入れがあることが指摘され、川瀬氏も弘治二年（一五五六）という「室町末期の筆蹟にまがうことがないことが判明するという事実があった」「室町時代の書写本と再認識した」とした（注6）。

だが成簣堂本を実際に閲覧してみると、この校合の朱書は、本文の随所に見える朱の書き入れとは色を異にしており、字体も異なっており、本文や書き入れと同筆であるのかは稿者には判定出来ない。また巻三十一・巻三十二冊の末尾に校合の奥書があるということは、巻三十三以降の四冊の校合は別のものなのであろうか。成簣堂本の現状は「蘇峰新表紙補配」とある通り（注7）、徳富蘇峰による明るめの茶表紙で改装されており、原

装を探るのも容易でない。また静嘉堂本や蓬左本が鳥の子紙の装飾料紙に麗筆で書写されているのに比し、成簀堂本は、川瀬氏は「達筆な書風である」「但し、やや巧みでない筆蹟の助筆の巻（巻五・六等）が交じっている」（注8）とするが、袋綴の楮紙に記されており、墨継ぎも等間隔でなく且つ筆勢にもかなりむらがある。全冊に細かに異文や校勘等が、朱や墨書で細かに書き入れられており、静嘉堂本や蓬左本と同じく写本であるとはいえ、その書写の様態や目的・使途等において、性格を全く異にすることは明らかであろう。

但し成簀堂本は、右のごとき数々の書写に関する不審な点を踏まえても、古写本の限られる『源平盛衰記』において、蓬左本や慶長古活字版を約半世紀遡る年記が見える点は、やはり注目される。数多の複雑な書き入れも、調査検証することで、本来的な本文を遡求する重要な手掛かりとなる可能性を思わずにはいられない。成簀堂本をめぐっては、既に岡田氏により論考が重ねられているが、稿者は『源平盛衰記』の近世期における本文、流布本の形成を追求する上でも、成簀堂本の検証から有益な示唆を得られるものと確信し、閲覧調査を重ねている（注9）。

本稿は、その閲覧調査に関する中間報告として、成簀堂本最終冊に収められる『源平盛衰記』全四十八巻の最終章段において、建礼門院平徳子が「六道ノ苦樂ヲ經タル有様ヲ此世ニ准テ申候ハン」と語るうちの、畜生道についての語りに含まれる志賀寺上人説話の本文を取り上げ、考察したい。

近付タリケン同道ト（シ）ナカラ怖（ロシ）クソ覚ユル清和天皇ノ二陽成御母条后ト申ハ贈太政大臣長良御女也ケルカ在原業平（カ）忍ツ、五条渡ノ西ノ對ノ亭（アバラヤ）ニ月ヤアラヌト詠（メ）ケリ寛平法皇（ノ）京極（ノ）御息所ハ時平大臣（ノ）御娘志賀寺日吉詣御時イ詣ノ御時彼寺ノ上人奉（リ）レ係レ心ヲ今生ノ行業ヲ譲（リ）

（巻第四十七・四十八冊二十七丁裏一行）

二　『源平盛衰記』志賀寺上人説話の本文

まずは検討対象である成簀堂本巻第四十八の、建礼門院が「畜生道（チク）ニ云（イ）ナサレタリ」「昔（ムカシ）モタメシノ候ケレバコソ」「今（イマ）モ昔（ムカシ）モ男女（ナン）ノ習（ナラ）ハザル不（ヨバ）レ及（ラコト）レ力事ナレバ。兎（ト）テモ角（カク）テモ候ナン」と語る志賀寺上人説話について、当該本文を記す半丁分の本文全体を、出来るだけ原本の配字通りに掲げる。

奉ラント申ハ。ヨシサラハマコトノ道ノシルヘシテ我ヲイサ
ナヘユラク玉ノ緒ヨシサラハ初春ノハツネノケウノ玉箒手ニ
トルカラニユラク玉ノ緒ト詠給テ御手ヲ授給ケリ
源氏女三宮ハ柏木右衛門督ニ通テ薫大将ヲ産メリ
誰世ニカタネハ蒔シト人問ハイカヽ岩根ノ松ハコタヘント
源氏ノ云ケンモ耻ヤ狭衣大将ハ聞ツヽモ涙ニクモルト忍ケリ　（巻第四十七・四十八冊二十七丁裏十一行）

右に見るごとく、成簣堂本の書き入れは、本文の抹消、語句の注記、漢字の付訓及び訓み副え、異文注記と多様であり、書き入れの大半は一筆と思われるが、墨色の濃淡等もあり、一様に検証するのは困難な点もある。

志賀寺上人説話の本文の箇所では、京極御息所が志賀寺詣の際に上人と邂逅のあったことを、「日吉詣御時イ」と叡山麓の日吉社詣の際であると異文注記している。岡田三津子氏は、蓬左本の他、焼失した黒川本（早稲田大学図書館蔵無刊記整版本リ5/5356に黒川本本文の一部が書き入れられている由であるが、稿者は原本未調査）本文にも「日吉詣ノイ」の注記があることを報告している（注10）。

より注目されるのは、五行以下の志賀寺上人の言「今生ノ行業ヲ譲リ奉ラント申セバ」と「ヨシサラバ」歌の本文の間に印を書き入れ、七行目の「ヨシサラハ」を見せ消し、「初春ノ」歌の本文を墨線で結んでいる点である。これは、「ヨシサラバ」の初句を誤って繰り返してしまったものを抹消し、「初春ノハツネノケウノ玉箒手ニトルカラニユラグ玉ノ緒」一首の本文は、「ヨシサラバ」歌の本文の前に入ることを示す書き入れであろうか。「イ」の注記が見えないことは、親本から書写する際に、「ヨシサラバ」を重複して記した際に誤りに気づき、「初春の」歌一首を落として写していたことに気づいたという事情であったのだろうか。稿者には、墨色や筆勢を見ても判断がつかない。

ここで成簣堂本の当該本文の特異性を考えるため、流布本『源平盛衰記』本文を参照してみたい。一般に『源平盛衰記』の本文を引用する際は慶長古活字版の本文が参照されているが（注11）、各巻の本文中に章段分けがなく、句点もない無訓漢字片仮名交のその本文は、文書類の通読にも困難を極める。慶長古活字版

の本文のみから、『源平盛衰記』の本来的な本文の読み（訓み）を確かめることは不可能と言えよう。ひろく『源平盛衰記』が通読される上では、その本文への付訓等は必須のものであった筈である。従って稿者は、『源平盛衰記』の底本として、無訓漢字片仮名交の慶長古活字版、元和寛永古活字版の本文に、句読点や訓を付して流布本（付訓漢字片仮名交の無刊記整版本）の祖型を成したと思われる乱版の本文を参照している。以下に右の成簀堂本に対応する乱版の本文を、これも出来るだけ原本の配字通りに掲げる（注12）。

近付タリケン。同道ト云ナカラ。怖シクソ覺ル。清和天皇ノ。二條ノ
后ト申ハ。贈太政大臣長良御娘ナリケルカ。在原ノ業平カ忍
ツ、。五條渡ノ西ノ對ノ亭ニ。月ヤアラヌト詠ケリ。寛平法皇ノ。
京極ノ御息所ハ。時平ノ大臣ノ御娘。志賀寺詣ノ御時。彼
寺ノ上人奉リ懸(レ)心ヲ。今生ノ行業ヲ讓リ奉ラント申セハ
ヨシサラハ眞ノ道ノシルヘシテ。我ヲイサナヘユラク玉ノ緒ヲ
ト打詠給テ。御手ヲ授給ケリ。源氏ノ女三宮ハ。柏木右衛
門督ニ通テ。薫大將ヲ産メリ
誰カ世ニカ種ハ蒔シト人問ハ。イカ、岩根ノ松ハ答ン
ト源氏ノ云ケンモ耻シヤ。小衣ノ大將ハ。聞ツ、モ涙ニクモルト忍ケ
リ。天竺。震旦。我朝。貴モ賤モ。燈ニ入夏ノ蟲。妻ヲ戀。秋

（二十三丁裏二行）

志賀寺上人の「ヨシサラバ」詠に加え、光源氏の「誰ガ世ニカ」詠（『源氏物語』柏木）を前後の本行の本文から改行し、一行を以て配す版面は、慶長古活字版（巻第四十八二十九丁裏・三十丁表）以来のものである。即ち当該説話の含まれる「女院六道廻物語事」の章では、京極御息所と光源氏と二首の詠歌を本行本文からは分けて記すのが流布本のかたちである。

しかるに成簀堂本は、何れの歌も独立して記してはおらず、本行の本文にそのまま続けて書いている。後にも触れるが成簀堂本は、本行本文は片仮名漢字交で記されているが、和歌については平仮名漢字交表記で記しており、墨線や「。」印は歌を改行して一行で記すべきと書き入れたものではなく、やはり、「ヨシサラバ」歌と「初春ノ」歌との掲出順を入れ替えること

（二十三丁裏十二行）

を示したものと判断される。

だがそもそも流布本は、「初春ノ」歌を載せない。これをいかに考えるべきであろうか。静嘉堂本は欠巻の箇所であるため、蓬左本の本文を参照し、検証してみたい。蓬左本の当該箇所の本文は以下の通りである（注13）。

そ覚ゆる清和天皇の二條の后と申ハ贈太政大臣長良　（三十四丁裏四行）
御娘なりけるか在原業平か忍つゝ五條わたりの西のたいの
あはらやに月やあらぬとなかめけり寛平法皇の京極の
御息所は時平おとゝの御むすめしかてらまうての御時かの　（三十四丁裏十行）
寺の上人こゝろをかけ奉りこんしやうの行業をゆつり
奉らんと申せハよしさらハまことのみちのしるへして我をいさ　（三十五丁表一行）
なへゆらく玉のをとうちなかめ給て御手をさつけ給けり源
氏の女三の宮ハ柏木のゑもんのかミに通ひてかほる大将を
うめりたか世にかたねをまきしと人とはゝいかに岩ねの
松はこたへんとけんしのいひけんもはつかしや狭衣の大将　（三十五丁表四行）
はきゝつゝも涙にくもると忍ひけり

はつ春のはつねのけふの玉はゝきイ　てにとるからにイ

蓬左本も成簀堂本と同様に、京極御息所の詠歌も光源氏の詠歌も本行の本文に続けて記しており、当該歌を改行して独立して記すことはしていない。だが本行に記されるのは、流布本と同じく、「よしさらばまことのみちのしるべして我をいざなへゆらぐ玉のを」の京極御息所詠一首のみであり、「はつ春の」歌は異文注記として書き入れられているのである。即ち蓬左本が参照している異本は、「よしさらば」詠を載せず、「はつ春の」詠のみを載せる本文であったのだろうか。この異文注記に不審が残るのは、「はつ春の」歌の上の句と下の句とが分けて注記されており、しかも下の句は四句「てにとるからに」のみを記す点である。結句「ゆらぐ玉のを」は、「よしさらば」歌にも「はつ春の」歌にも共通するためであり、成簀堂本が目移りで写し間違えたことにも関係があるのかも知れない。

蓬左本の本文に従って異文注記を解してみると、十行目に

「と、うちながめ給て、御手をさづけ給けり」とあるため、歌の詠者は京極御息所以外には考えられない。『万葉集』巻第二十所載の大伴家持詠古歌の引用ではあるが、「玉ばはき」「ゆらぐ玉のを」の歌句はそれぞれ何を指すことになるだろうか。御息所自身が、自らが差し出す手の尊さや忝さにうち震える上人の心情を推し量り、上人の立場になりかわり詠んだ歌ということか。志賀寺上人の「こんじやうの行業をゆづり奉らん」の言に心動かされた京極御息所の返答の詠歌となるが、僧の破戒の恋慕に素直に応じた御息所の詠歌という本文が、建礼門院の畜生道に関する語りの例えの本文として妥当であるのか、なお一考の余地があろう。

一方、成簀堂本の注記に従って本文を解してみると、志賀寺上人の「今生ノ行業ヲ譲リ奉ラン」言を受け「ト申セバ」と続くが、上人が主体のまま「初春ノ」の古歌を引用した贈歌が続き、それを受けて「ヨシサラバ」の京極御息所の返歌があるかたちとなろうか。『俊頼髄脳』等に見える志賀寺上人説話と同様に、「サラバ」は、上人の「今生ノ行業ヲ譲リ奉ラン」言を受けてのものではなく、「初春の」の贈歌を受けていることとなり、御息所が贈歌の歌句を受けて「我ヲイザナヘユラグ玉ノ緒」と上人に詠み掛けている文脈となろう。但し、「申セバ」という助詞に続いても主格が変化することなく、また二首の歌本文が改行して二行に分けて併記されているわけでもない。二首が本行本文にいかなる字句をも挟まずに連続するかたちで記されていたと仮定し、果たしてそのような本文で文脈が解せるものか、また成簀堂本の親本なり対校本に、そのような本文を有する『源平盛衰記』があったのか、不審な点は残る。或いは成簀堂本の当該の書き入れには、他の『源平盛衰記』本文の異文注記や本文対校以外の情報が混入している可能性も考えなくてはならないのだろうか。

成簀堂本と蓬左本という古写本に共通する本文や注記が窺える点は注目されるが、『源平盛衰記』の志賀寺上人説話の本来的な本文を遡求するには、なおも材料が足らないように思う。

但し、当該の志賀寺上人説話は前後に、『伊勢物語』（四・西の対）や『古今和歌集』（仮名序・巻第十五恋歌五）に見える在原業平詠の初句「月ヤアラヌ」が見え、また『狭衣物語』の狭衣大将の詠歌の一部と見られる「聞ツツモ涙ニクモル」が見えている（注14）。いま仮に、「初春の」歌を有する成簀堂本や蓬左本に従うとすれば、ここには『万葉集』の大伴家持詠が引用されているわけであり、志賀寺上人説話を含む当該の六道語りの本文には、『古今和歌集』（『伊勢物語』）『万葉集』『源氏物語』『狭衣物語』所載歌が列んでいることになる。『源平盛衰記』「女院六道廻物語事」の前章「法皇大原入御事」には、「又時々ノ御心慰ニヤ。古今。萬葉。源氏。狭衣。其外ノ狂言綺語ノ物語。多取散サレテ。折々ノ御手スサミ。昔ノ御遺ト覺ヘテ哀也」（傍線稿者）と、建礼門院の庵室内を描写する本文が見えていることを併せて考えれば、「初春の」歌を有する本文が『源平盛衰記』の本来的な本文であった可能性も考えられるだろうか。傍証とも言えない点だが、指摘しておきたい。

なお、前掲乱版の本文は、「ヨシサラバ」詠の結句に「玉ノ緒」と玉をダマと濁音に訓み、「誰ガ世ニカ」詠の初句をタレカヨニカと字余りに訓んでいる。「玉」「誰」に既製の付訓活字を充て組版したことによる誤と思われるが、この訓は無刊記整版本の本文にも引き継がれ、寛政八年（一七九六）版行の京茨城多左衛門方正版以降の付訓漢字片仮名交整版本に至っている。これも稿者が乱版を流布本の祖型と認定する所以である。

三　他文献に見える志賀寺上人説話

志賀寺上人説話は、『俊頼髄脳』以下、『古来風躰抄』等の歌学書や『三国伝記』等の仏教説話集をはじめ、諸書に類話が見える。

まず『平家物語』諸本について見ると、延慶本第六末（巻十二）「法皇小原ヘ御幸成ル事」（注15）に見える建礼門院の六道語りの本文には、「天竺ノ術婆迦ハ后ノ宮ニ契ヲナシテ墓ナキ夢地ヲ恨」以下、和漢の恋愛譚の例が引かれており、志賀寺上人説話に関しても以下のごとくある。

亭子ノ院ノ女御京極御息所ハ時平ノ大臣ノ女也日吉詣給ケルニ志賀寺聖人心ヲ奉テ懸ル今生之行業ヲ奉譲シカハ哀ヲ懸給テ御手ヲタヒ実ノ道ノ指南セヨトスサマセ給キ在原業平ハ五条亘ノアハラ屋ニ月ヤアラヌト打ナカメ源氏ノ女三宮ハ又柏木ノ右衛門督ニマヨヒテ香ヲル大将ヲ産給ヘリイカ、岩根ノ松ハ答ムト源氏ノ云ケムモハツカシヤ狭衣之大将ハ聞ツ、モ涙ニクモルト打ナカメ天竺震旦我朝高モ賤モ女ノ有様程心憂事候ワス（七十丁表～裏）

延慶本は『源平盛衰記』と語る順には相違があるものの、両者にはほぼ対応する和漢の恋愛譚が見える。但し延慶本は、志賀寺上人説話に限らず何れの例においても「実ノ道ノ指南セヨ」（傍線稿者）「月ヤアラヌ」「イカゞ岩根ノ松ハ答ム」「聞ツ、モ涙ニクモル」と歌句の一部のみを引いて語るため、歌は本行本文から独立して記されることはない。

但し、延慶本の御息所歌の「指南（しるべ）セヨ」の歌句は『源平盛衰記』とは異なるが、四部合戦状本（注16）とは共通している。四部合戦状本も「参日_吉ヘ」と、京極御息所が日吉社詣をした際の志賀寺上人からの言を「今生行業奉譲君申ケレ」とする本文が見えている。一方、四部合戦状本は、業平の例で歌句を引くことはなく、また『狭衣物語』の例は全く引かれていない。だが注目されるのは、光源氏の詠歌「誰世ニカ種ヲ蒔シト人問ハ岩根ノ松ハ何答ン」が本行本文から改行され、歌一首が一行で記されている点であり、この点は『源平盛衰記』の慶長古活字版以降の版行本と共通する。但しその歌句については、下の句が「岩根ノ松ハ何（イカガ）答ヘン」と、歌句の順が入れ替わっている。こうした歌句の多様性は、建礼門院の六道語りを独立して取り上げた御伽草子の作品にはまま見える（注17）。

延慶本や四部合戦状本の本文形成を検討する上で注目されてきた『宝物集』については、今井正之助氏（注18）が、当該の建礼門院の六道語りの中で、『源平盛衰記』においても志賀寺上人説話に先行し、「天竺ノ術婆訶」「阿育大王ノ。鳩那羅太子」

「震旦ニハ。則天皇后」「染殿后」と列挙して語られるこれら例が、『三国伝記』等でも同様であることを指摘し、さらに『源平盛衰記』の志賀寺上人説話の上人の言にも見える「今生ノ行業ヲ譲リ奉ラント申セバ」の本文が、『宝物集』の「今生の行業をゆづりたてまつると云事なり」（七巻本巻第五）と共通することも指摘している。『宝物集』には、「初春の」歌も収載されており注意されるものの、『源平盛衰記』に引かれる光源氏の詠歌や『狭衣物語』の例は見出せない。

ところで『平家物語』諸本以外で、成簀堂本の志賀寺上人説話本文を考察する上で注目されるのは、天正本系諸本『太平記』の本文である（注19）。まず、国立国会図書館蔵教運本（き-17、旧称は義輝本、原装は楮紙袋綴の由）巻第三十六「志賀寺ノ上人ノ事」より本文を抜粋し原本の配字に従い掲げる（朱点や朱引の書き入れは省略する）（注20）。

タル処ニ立京極ノ御息所志賀ノ花園ノ春ノ気色ヲ御覧シテ御皈アリケルカ御車ノ物見ヲアケラレタルニ此上人御目ヲ見合セ進テ不レ覚へ心迷ヒ魂ィウカレニケリ遙（中　略）　（四十丁裏七行）

言ノ葉ニ情ケヲ懸ハ慰ム心モヤ有ルト思召テ上人是ヘト被レ召ケレハワナ〳〵トフルイ〳〵中門ノ御簾ノ前ニ跪ィテ申出シタル叉モナク只サメ〳〵トソ泣給ヒケル御息所ハ偽ナラヌ気色ノ程哀レニモ又恐シクモ思食ケレハ雪ノ如クナル御手ヲ御簾ノ内ヨリ少シ指出サセ給ヒタルニ上人御手ニ取付テ　（四十丁裏九行）

初春ノ初子ノ今日ノ玉箒手ニ取カラニユラク玉ノ緒ヲ

ト讀ケレハヤカテ御息所トリアヘス　（四十一丁裏一行）

ヨシサラハ真ノ道ノシルヘシテ我ヲイサナヘユラク玉ノ緒

トアソハシテ聖ノ心ヲ慰メ給ヒケリカヽル道心堅固ノ聖人　（四十一丁裏十行）

『太平記』では、志賀寺上人と京極御息所の歌の贈答が成簀堂本『源平盛衰記』と同じく近接し並べて取り上げられている。

注目されるのは、古態本とされる西源院本に「極楽之玉ノ臺ノ蓮ス葉ニ我ヲイサナヘユラク玉ノ緒ト遊走ソ、聖ノ心ヲ慰メ給ケル」（巻第三十七）とあるのをはじめ、神宮徴古館本・慶長古活字本等、多くの本に見える御息所歌の上の句が「極楽の玉の台の蓮葉に」であるのに対して、右の教運本に「ヨシサラバ真ノ道ノシルベシテ」と、水府明徳会彰考館蔵天正本に「ヨシサラハ真ノ道ニシルヘシテ」（傍線稿者）と、同じく彰考館蔵毛利家本に「ヨシサラハ真ノ道ノ知ベシテ」（巻第三十七）と、『源平盛衰記』と共通する歌句で見えていることである。

右のごとく『太平記』の志賀寺上人説話は詳細であり、『源平盛衰記』の当該説話のように、和漢の故事として列記されているわけではない。だが巻第二十一「覚一真性連平家ノ事」には、塩冶高貞の妻に懸想した高師直が侍従の局を介して言い寄る話しが見えるが、侍従は、「カヽルタメシハ又世ニナキ事ニシモ侍ラズ彼二条五条ノ后ノ宮朧月ノ夜ノ内侍尚侍高安ノ女房ニ至マデ」（傍線稿者）と、『源平盛衰記』の建礼門院の六道語りにも引かれた、『伊勢物語』の業平・高子の恋愛譚を例に引き語り始める。その侍従の語りの中には、以下のごとく、やはり『源平盛衰記』と同じく、明子に思いを寄せた僧正が紺青鬼と化した例、則天武后が自らと契りを結んだことを張文成に『遊仙窟』として作らせたとする話が見えている。

彼染殿ノ后ノ宮ノ青キ鬼ニ被レ悩何ノ故トカ思食スサレハ京極ノ御息所ハ我ヲイサナヘト口詠異國ノ則天武后ハ張文成ニ相馴テ遊仙窟ノ其中ニ情ノ色ヲ残サレテサノミニ度重ラハコソ安濃浦ニ引ク網ノ人目ニ餘ル憚モ候ハメ（教運本）

何れも先に見た『宝物集』や『平家物語』延慶本・四部合戦状本とも共通する和漢の恋愛譚であり、今井氏の指摘する通りいわば定型化していたようである。

天正本は巻第一尾題に天正二十年（一五九二）九月書写の奥書がある。『太平記』の本文については他にも調査、留意すべき点は多くあろうが、慶長年間を目前に控えた室町末期に記された志賀寺上人説話において、その語りに共通する歌句が見出される点に注目しておきたい。

四　小括――成簀堂本に見る『源平盛衰記』本文研究の課題と可能性――

成簀堂本は先述の通り、本行本文が漢字片仮名交で記されているものの、歌は漢字平仮名交で一行で写されている。静嘉堂本や蓬左本といった古写本が全編、平仮名漢字交であるのに対し、版行本は、慶長古活字版以降、三種の絵入本を除いて、流布本は片仮名漢字交の本文で版行された。いわば成簀堂本の書写形態は、写本と版行本との中間的特徴を備えているとも言えるわけだが、これは、成簀堂本が参照した親本の書写形態をそのまま引き継いだものなのだろうか。

この疑問に示唆を与えるのが、次に掲げる成簀堂本巻第四十五・四十六冊冒頭部の本文を書写する一丁及び二丁である。巻第四十五「内大臣關東下向。付池田宿遊君事」の章に相当するが、一丁が書写の際の反故を誤って綴じたもの、二丁が書き改

め清書した本紙と思われる。両丁の本文を出来るだけ原本の配　字の通りに掲げ、表記他に差異のある箇所に傍線を付す。

＊本文一丁（反故ヲ誤リ綴ジタカ）

源平盛衰記裳巻第四十五　（一丁表一行）

去七日ハ九郎判官前内大臣以下ノ虜共相具ソ都ヲ
立テ六条堀川ノ宿所ヲ打出ケルニ大臣武士ヲ召テ此ニ在シ
小者ハ母モナシ吾モ下ナハ憑シキ者モナクテイカハカリカハ歎
侘侍ラン残シ留ルコソ心苦ク侍レ相構テ不便ニシ給ヘト
宣モ敢ス御涙ヲ被流ケルソ哀ナル夜部六条川原ニテ失
タルヲハ知給ハス角宣ケリ猛キ夷ナレ共恩愛ノ道ハ哀
也ト皆袖ヲソ絞ケル角テ内大臣父子美濃守則
清以下都ヲ出給テ會坂ノ関ニカヽリ都ノ方ヲ顧給
テイツシカ大内山モ隔ヌト流ス涙ヲ袖ニ裏ミ東ヤ路ヤ今
日ソ始テ蹈見給テ昔蟬丸ト云シ世捨人山科ヤ音　（一丁表十一行）
羽ノ里ニ居ヲシメ此関ノ邊ニ藁屋ノ床ヲ結テ常ニ琵琶　（一丁裏一行）
ヲ弾ツヽ和歌ヲ詠ソオモヒヲ述是ヤ此往モ還ルモ別ツヽ
知モ知ヌモ逢坂ノ関
　世中ハとてもかくても有ぬへし宮もわらやもはてしなけれハ　（一丁裏四行、以下空白）

＊本文二丁（書キ改メタ本来ノ本紙一丁ニ当タルカ）

源平盛衰記裳巻弟四十五　（二丁表一行）

去七日ハ九郎判官前内大臣已下ノ虜共相具ソ都ヲ立テ
六条堀川ノ宿所ヲ打出ケルニ大臣武士ヲ召テ此ニ在シ小
者ハ母モナシ吾モ下ナハ憑敷者モナクテイカハカリカハ歎

侘侍ラン残シ留ルコソ心苦ク侍レ相構テ不便ニシ給ヘト宣モ敢ス御涙ヲ被流ケルソ哀ナル夜部六条川原ニテ失タルヲハ知給ハス角宣ケリ猛キ夷ナレ共恩愛ノ道ハ哀也ト皆袖ヲソ絞ケル角テ内大臣父子美濃守則清已下都ヲ出給テ會坂ノ関ニカヽリ都ノ方ヲ顧給テ早晩大内山モ阻ヌト流ス涙ヲ袖ニ裹ミ東ヤ路ヤ今日ソ始テ蹈見給テ昔蟬丸ト云シ世捨人山科ヤ音羽里ニ居ヲシメ此関ノ邊ニ菜屋ノ床ヲ結テ常ニ琵琶ヲ弾ツヽ和歌ヲ詠シテ述フレ懐ヲ

是や此ゆくも帰るも別れてハしるもしらぬも逢坂の関

（二丁表十一行）

世中ハとてもかくても有ぬへし宮もわらやもはてしなけれハ

（二丁裏一行）

流泉啄木ノ二ノ曲ヲ傳ントテ博雅三位三年マテ夜々通シ

（二丁裏五行、以下六行文本文省略）

両丁の本文を比較すると「以下」と「已下」、「憑シキ」と「憑敷」、「イツシカ」と「早晩」、「隔ヌ」と「阻ヌ」、「藁屋」と「菜屋」、「オモヒヲ述」と「述フレ懐ヲ」等、幾つもの相違があるものの何れも漢字の選択、漢字表記と片仮名表記の別、漢文体表記の選択の差異に止まるものであり、ひとまずは本文に異同はないと見て良いのであろう。また、「立テ」と「立テ」、「音羽ノ里」と「音羽里」のごとく、訓み副えの仮名表記の有無、文字の位置や大きさにも相違があるが、これも本文の異同とまでは言えまい。但しこうした差異が、成簀堂本の書写者が親本を参照しつつ記す際に起こっていたとすれば、それは即ち書写者の書き癖や恣意に起因するものであり、成簀堂本の本文を参照、検討する際の重要な注意点となる筈である。

またより注目されるのは、『後撰和歌集』『小倉百人一首』等に見える著名な「是ヤ此」の蟬丸歌が一丁では、本行本文に続けて漢字片仮名交で記され、続いて二首目の「世中ハ」の蟬丸歌が改行して一字ほど下げて漢字平仮名交で記されている点である。もう一方の二丁の本文では、二首の蟬丸歌共に、それぞれ本行本文から改行して一字下げて漢字平仮名交で一行で記され、その後、「流泉啄木ノ二ノ曲ヲ」の本文は字高を戻し、漢字片仮名交で書き継がれている（なお「世中ハ」の蟬丸歌は、巻第四十八「法皇大原入御事」（ホウワウオホハラジュギョウ）にも引かれている）。

即ち、この二丁の表記の差異から想定されるのは、成簀堂本

の書写者は、親本には漢字片仮名交で本行本文に続けて記されている歌を、意図的に行を改め、また歌本文のみを漢字平仮名交に改めて一行に記す、そうした改編を並行しつつ書写しているのではないかということである。成簀堂本には、親本とは異なる、書写者の意図や姿勢が反映されているのではなかろうか。そうだとすればこの点は、成簀堂本の本文を参照、検証する際の注意点となろう。

しかし問題はこれだけではない。一首目の蟬丸歌は一丁では「往モ還(ル)モ別ツ、」と、二丁では「ゆくも帰るも別れてハ」と、漢字の用字も訓み副えも異なっているが、三句の歌句に「別れつつ」と「別れては」の相違がある。しかも慶長古活字版以降の版行本の歌句は「ユクモ歸(カヘ)ルモ別(ワカレ)テハ」であるが、蓬左本（巻第四十五二丁裏六行から九行の本文に相当）は、「これや此(コノ)行(ユク)も帰(カヘ)るも別つ、しるもしらぬも逢坂(アフサカ)の関(セキ)」と、「別つつ」となっている。前者は『後撰和歌集』の歌句と、後者は『百人一首』の歌句と一致するが、成簀堂本が一丁と二丁とで歌句が相違するのは、著名な歌ゆえの単なる誤写ということなのだろうか。それとも、参照している親本は一本ではなく、複数の対校本を参照しつつ書写を行っている、或いは『源平盛衰記』以外の資料をも参照しつつ書写が行われていることも想定する必要があるのだろうか。当該の両丁の異同は、成簀堂本の書写形態をめぐる問題や課題を示唆しているように思われる。稿者は、今はこれ以上に成簀堂本巻第四十五一丁二丁本文の異同を考察する材料を持たないが、成簀堂本には右のごとき問題点があることも留意しておかねばなるまい。

本稿で注目した志賀寺上人歌をめぐる書き入れが、果たして室町後期を遡る『源平盛衰記』本文を反映したものであるのか、『源平盛衰記』の本来的な本文、或いは古態の本文を追求する手掛かりとなり得るのか。様々な書き入れをはじめ、膨大且つ多様な情報を有している成簀堂本であるからこそ、なおも静嘉堂本や蓬左本といった古写本の本文との比較検討が必要である。或いはまた慶長古活字版や乱版、無刊記整版といった版行本の本文との比較検討からも示唆が得られるであろう。四十八巻にも亘る『源平盛衰記』の本文量を思えば気の遠くなるような作業ではある。だが今のところ、『源平盛衰記』の本文を具体的に検証するには、一部欠巻があるとはいえ、成簀堂本を超えるまとまった資料は無いように思われる。

（注1）「第四章　読み本系平家物語の成立と表現・四　源平盛衰記の伝本」（『軍記物語論究』一九九六年、若草書房、所収）、「1　源平盛衰記写本の概要・付編　資料調査から新研究へ」（『文化現象としての源平盛衰記』二〇一五年、笠間書院、所収）。

（注2）渥美かをる氏「解題　校異」（古典研究会『名古屋市蓬左文庫蔵　源平盛衰記(六)』汲古書院、一九七四年、所収）。なお玄庵三級について、岡田三津子氏の論考「蓬左文庫蔵『源平盛衰記』写本再考――書写者玄菴三級の検討を通して――」（関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓　第三集』二〇〇七年、和泉書院、所収）がある。

（注3）「第二編　活字印刷術の伝来並びに其の発達―近世初期に於け

る印刷文化―・第八章 国文学書の活字開版・第二節 国文学書活字開版の概観と其の種類」（『増補 古活字版之研究 中巻』一九六七年、日本古書籍商協会、所収）。

（注4）「第一部 源平盛衰記本文に関する基礎的研究・第一篇 古本系伝本の認定・第一章 写本書誌」（『源平盛衰記の基礎的研究』二〇〇五年、和泉書院、所収。初出は二〇〇二年三月）。

（注5）川瀬一馬氏「第一編 古写本・第六章 江戸時代初期（慶長至寛永）国書」（『お茶の水図書館蔵新修成簀堂文庫善本書目』一九九二年、石川文化事業財団お茶の水図書館、所収）。

（注6）川瀬一馬氏「成簀堂文庫随想（132）」（『財団法人石川文化事業財団月報290号』一九九六年十月、所収）。なお当該文中に川瀬氏が「四十七巻、二十冊の内容をつぶさに閲覧した女性の研究者」と言及するのは岡田三津子氏だと思われる。

（注7）前掲（注5）。

（注8）前掲（注5）。

（注9）例えば、名古屋市図書館鶴舞中央図書館河村文庫蔵『源平盛衰記』乱版（河7:帙1:7）には、「異本無目録」「異本脱一二巻」「古寫本校」等として、河村秀穎・秀根兄弟何れかの筆と思われる異本や古写本との校合が諸所に朱で書き入れられているが、この校合には成簀堂本と酷似、或いは類似する書き入れが幾つも見出せる。その詳細は別稿を期したいが、成簀堂本の本文を検証することは、近世中・後期にまで及ぶ『源平盛衰記』本文の流布と享受を追究する問題にも繋がるものと考える。

（注10）岡田三津子氏「第一部 源平盛衰記本文に関する基礎的研究・第三篇 古本系伝本相互の関係・第一章 異本注記」（前掲（注4）所収。初出は一九九九年三月）。

（注11）多くが勉誠社刊の内閣文庫蔵本影印版を参照しており、巻第四十二まで既刊の三弥井書店刊『中世の文学 源平盛衰記』も内閣文庫蔵本を底本としている。但し、渥美かをる氏「解題」（『源平盛衰記 慶長古活字版 第六冊（巻第四一―巻第四八）』勉誠社、一九七八年、所収）が、内閣文庫蔵本に見える付訓や校異等の書き入れの大半が「附訓版本」に拠ると指摘するように、同本には、複数の手になる書き入れがあるものの、それは無刊記整版本の付訓等が特に考慮されることもなく参照、引用されている例が大半であると稿者も見ている。

（注12）参考に架蔵本（巻第四十七・四十八一冊のみの零本で全丁古活字版であり乱版の端本か）の当該丁の画像を最後に掲げる。なお川瀬一馬氏は乱版について、「寛永中刊」「整版の部分は活字版を底本として覆刻したものに相違ないが、一部分活字版を交じへて乱版の形式になついてゐるのは、整版の部分の彫版が不足で活字を以て補つたとも解し得るが、本書の如きは寧ろ活字版の摺残りを整版に加へて、摺残りを生かしたものではあるまいかと思はれる」（『龍門文庫善本書目 其の四 古活字版の部』一九八一年三月）と指摘しているが、稿者も基本的には従うべき見解だと考える。

（注13）前掲（注2）『名古屋市蓬左文庫蔵 源平盛衰記（六）』所収の影印版に拠る。

（注14）延慶本注釈の会編著『延慶本平家物語全注釈 第六末（巻十二）』（二〇一九年、汲古書院）〔注解〕は、『狭衣物語』巻第四の狭衣大将が入道の宮（女二宮）を出家に追い込んでしまったことに対する自戒の詠「手に馴れし扇はそれと見えながら涙にくもる色ぞことなる」を引いた可能性を指摘する。有朋堂文庫『源平盛衰記 下巻』（塚本哲三編輯、一九三五年）頭注は、「涙にくもる―戀ひてなく涙に曇る月影は宿る袖もや濡るる顔なるとあるを指すか」として、同じく巻第四に見える即位した狭衣による斎院源氏の宮への贈歌を引いたかと見る。狭衣と女二宮や源氏の宮との生憎な関係を思えば、何れの歌とも決し得ないように思う。

（注15）『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇別巻一 延慶本平家物語』、二〇〇八年、汲古書院、所収の影印版に拠る。

（注16）慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編校『平家物語 四部合戦状本下』、一九六七年、大安、所収の影印版に拠る。

（注17）例えば、『大原御幸（奈良絵本）』（『室町時代物語大成 第三』一九七五年、角川書店、所収）には、「〔京極の〕みやす所は、しかてらの上人に、まことのみちをしるへせよとて、御てをあたへ給き」「いよ〳〵いはねのまつはこたへんと、けんしのいひけんも、はつかしや」と見え、木村千鶴子氏・久保田淳氏「新資料紹介 小原御幸（翻刻）」（『国文学 解釈と教材の研究 第二二巻一号』一九七七年一月、所収）には、「みやす所は、しかてらの上人にまことのみちをしるへとせとて、御手をあたへ給候き」「いよ〳〵いはねのまつはこたへしんと、けんしのいひけんもはつかしや」と見える。なお両作品ともに、業平・高子の恋愛譚や『狭衣物語』には触れていない。

（注18）「平家物語と宝物集―四部合戦状本・延慶本を中心に―」（『長崎大学教育学部 人文科学研究報告 第34号』一九八五年三月、所収）

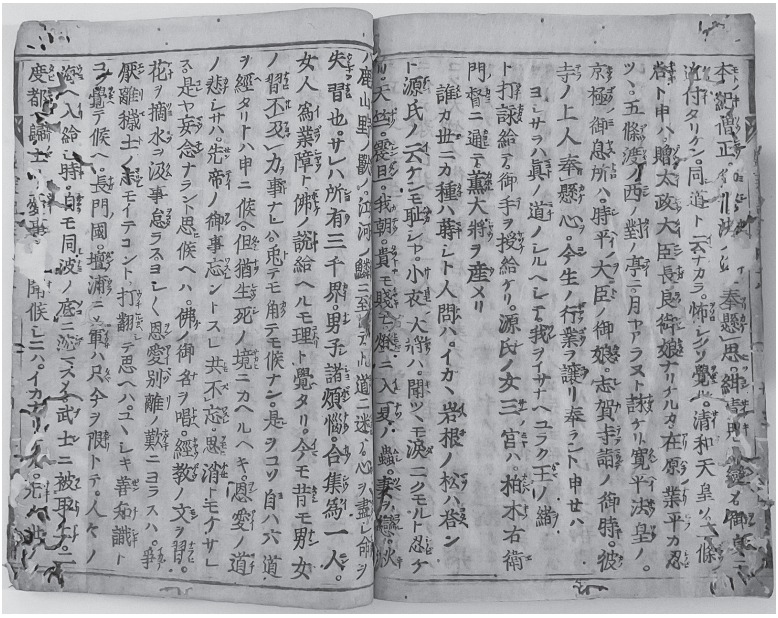
（注19）『太平記』本文の調査では、長坂成行氏『伝存太平記写本総覧』（二〇〇八年、和泉書院）と国文学研究資料館の紙焼写真帳を参照した。国立公文書館内閣文庫蔵野尻本の当該巻は天正本系ではない由で当該歌句は「極楽ノ玉ノ台ノ蓮ス葉ニ」（巻第三十八）となっている。

（注20）「国立国会図書館コレクション」に公開の画像に拠る。小秋元段氏の指摘に従い、義輝本の称を教運本に改める。

謝辞

貴重な資料の閲覧調査と資料の翻刻を御許可下さった一般財団法人 石川武美記念図書館 成簣堂文庫に深謝申し上げます。

附記

本稿はJSPS科研費 JP18K00295（基盤研究(C)課題「「源平盛衰記」の出版と流布に関する研究―日本人の歴史観形成の一階梯―」）の助成を受けたものです。

（注12）画像